

(公財) 日本ヘルスケア協会から

発行：日本ヘルスケア協会 事務局

今回は、9月12日発行のニュースリリースNo.85以降の動きについてご報告いたします。

1. 9月次記者会見では(株)INGENの櫻井社長が農業の成長グローバル産業化を論じました。

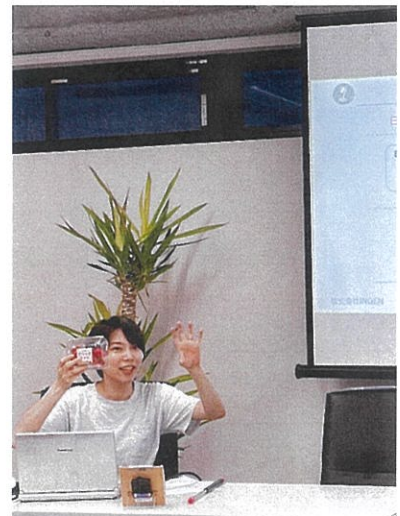
JAHlでは、わが国のヘルスケアの推進に資する画期的な商品ないしはサービスについて、当事者をお招きして紹介を受け、質疑に応じて頂く記者会見を、2020年の9月から毎月第2火曜日の夕方に実施してきています。これまで、例えば「インフルエンザ予報システム」(2021年1月)、「ベジメータ(野菜摂取状況の見える化)」(2021年10月)、「リモートセンシング技術の農業活用」(2022年2月)、「ナチュラルメディシンデータベース」(2022年6月)、「NEWTRISHアプリ(オーダーメイド栄養提案)」(2022年9月)、「プレサイン(感染症・健康情報配信サービス)」(2022年12月)、「SunnyBank(障害者専用クラウドソーシングサービス)」(2023年7月)等々のテーマを取り扱い、様々な反響を呼んできました。

9月12日開催の9月次記者会見には、気鋭の農業コンサルタントで、日本の農業の難点を改め、周到に仕組まれたアプリの力を使って成長グローバル産業にしようとして取り組んでいる(株)INGEN代表取締役・櫻井杏子氏にご登壇頂きました。

千葉大学農学部卒業の氏がアプリ制作の専門家である同窓生と構築しているのが「農の相棒・Mr.カルテ」。農業の生産管理を徹底し、品種ごとの生育シミュレーションにより生育のタイミングに合わせた栽培管理を提案されています。

従来、上手な農家の「カン」と言われてきたものの正体が生育シミュレーションであって、「開花」などの植物の生育を起点に計画を立てることです。生育が天候でずれてしまっても、このアプリでは自動で計画を変動させます。

一方、生育シミュレーションが出来上がったことにより、品種や産地が異なっても農家が自分で容易に対応できるようになりました。農家は自分の扱っている品種では専門家ですが、品種が違ったら素人であることがほとんどで、気候変動や社会経済情勢の変化によって品種を代えるようなことが難しかったのは事実です。櫻井氏のアプリは農家の栽培管理を抜本的に変える可能性があると思われます。記者会見以降、JAHl事務局に多くの問合せが来ています。



2. その他

○弊協会の令和4年度事業報告(案)と決算案のご審議を議題とする定時理事会が、協会多目的ホールで開催されます。引き続き、定時評議員会開催の日程調整中です。

○プラネタリーヘルス・イニシアティブ(PHI)の第3回会合が9月26日(火)午後開催され、現地訪問報告をはじめ、PHIの事業内容の検討、記念講演会の計画、専用ホームページの立ち上げ準備等が議論されました。第4回会議は10月23日(月)に開催されます。

○弊協会理事の小原道子先生が実行委員長を務められている「第17回日本ファーマシューティカルコミュニケーション学会」が10月15日(日)、帝京平成大学中野キャンパスにて開催されます。弊協会は後援団体に名を連ねております。